は近世の老大な各種資料を実に綿密に調査され活用されていることである。町史上巻全七一〇頁は序説加計町の地理から近世末までをあてているが、原始――戦国末までを思いきつて縮小し、そのうち六五〇頁までが近世の叙述にあてられている。つまり老大な近世史料に真正面からとりくみ実に綿密・丹念な地方史を描きあげられているのである。すなわち「政治と財政」の章では、近世村落の成立からはじめて広島藩の地方統治、村役人の問題、貢租の問題に及び、「社会と生活」の章では、階層構成とその分化から、人口の変遷、さらに「生活組織」として村の諸行事、年中行事、人間の一生、社会結合に及び、災害と対策に論及する。中でも圧巻は「産業と経済」の章である。ここでは農業、林業、鉱業、農村加工・醸造、水産業、交通運輸の発達、商業と金融の項目にわたつて、実に三四〇頁をさいている。そのうち、問題の隅屋の鉄山経営については、経営規模の推移と、砂鉄精錬にはつきものの木炭使用をめぐる農民との関係に焦点を合せて、多くの統計表を援用して豊富な資料を要領よく整理されている。隅屋の問題は、さらに交通運輸の項でも輸送に関して触れ、商業金融の項でも、資金の運用に関して触れられている。欲をいえば、「中国地方百数十人の鉄山経営者中最大のもの」である隅屋の鉄山経営を、もつと多方面から深く追究してほしかつたところであるし、第一〇〇表隅屋鉄山仕切先推移表としてまとめられている、製品の全国的な販売流通の問題、また製鉄技術の問題など、さらに深いつつこみがあれば、より豊かな問題提起になり得たかと惜しまれるが、もとより全体の構成からすれば隅屋――鉄山経営の問題にさまで集中することは許されないことであろう。この例のように、近世篇に多大の頁をさきながら、それは豊富な史料に真正面からとりくみそしてそれを圧縮して叙述されているのであつて、政治・経済・文化全体にわたつて、豊富な問題が提起されているのである。それは町史下巻近代篇にも、もとより共通する。ただ下巻は「町史」よりは、より「町誌」的要素にかたむきすぎているきらいはあるが、最後に結語として加計町の現状を分析する一章をもうけるまで、まことに周到な配慮である。

次に、以上に用いられた資料の抜粋が、上下二巻にまとめられている。「文献資料」は、土地関係・貢租・支配関係・村関係・河川交通関係・産業関係・村経済と加計市関係・文化関係に章別整理され、「伝承資料」として民謡（曲譜つき）方言・伝説・俗信が収載され、さらに寛永十九年から昭和三十四年にいたる米価表以下各種統計が、添えられている。これら資料は、いわゆる一件文書よりは一点で数十頁に達する検地帳・産物差出帖以下の冊子類を頻をいとわず収載されていることに特色があり、それだけに学界を益するところ絶大なものがあろう。敢て難をいえば、各所蔵者がその屋号を示されるにとどまり、所在地、また所蔵者別所蔵文書の概要など、整理のほしかつたところで、これは然るべき機会に公表されることを要望しておきたい。

広島県は、かねてより地方史研究のさかんなところではあるが、本書によつて、芸北地方史の決定版が打出されたといえよう。この蕪雑な紹介が、かえつて本書の真価をそこなうことをおそれるが、本書をここまでまとめあげられたスタッフ一同のご苦労に深く敬意を表したい。とともに、編集予定期間を二倍に延長されたという町当局の理解ある態度も特筆さるべきであろう。

（町史上巻　A5判七一〇頁　昭和三十六年三月刊　町史下巻　同七〇四頁　昭和三十六年九月刊　資料上巻　同八六九頁　昭和三十六年十一月刊　資料下巻　同九四九頁　昭和三十七年五月刊　何れも加計町役場発行）

（熱田　公）

## 奈良県政七十年史

奈良県七十年の歩みを記念した『奈良県政

七十年史』が、永島福太郎氏を編集者に、同氏はじめ、秋永政孝・野崎清孝・広吉寿彦・小野恵美男・中塚明・村田甚吾氏を執筆陣に加えて、このほど上梓をみた。ところで廃藩置県以来すでに九十一年、奈良県政七十年記念といえばあるいは不審に思われる方もあろう。それは廃藩置県で設置された奈良県は「近代国家化を急いだ明治政府が、その政策として弱小県整理を推進したことによ」つてわずか数年にして堺県に併合され、その堺県が明治十四年さらに大阪府に併合され、「いつたん独立の県政に浴した大和の国民は、再度の合併を快しとせない。やがて有志の提唱に基づき、大阪府から分離独立の運動を展開した。その運動が奏効して、(明治二十年)奈良県の(再)設置が発令されるにいたつた」結果なのである。ところでこの経緯は、廃藩置県後九十年を経て、いままた現実に提起されている問題でもある。急速な近代国家化の問題に代つて、いわゆる産業の高度成長のために、近畿を一丸として広域行政、さらには統合が、現実のプログラムとして上提されている。とくに奈良県は、大阪府への依存の高さが問題とされていることは周知のところである。こうしたときに、近畿統合の是非はともかくとして、県政の歩みをふりかえつてみることは、まことに時宜を得た企てであるといえよう。

さて本書は、第一編概説において奈良県七十年の歩みを概観し、第二編各説において奈良県再設置の顚末以下、県議会・県庁機構・町村制の変遷・農業・農地改革・林業・観光と文化財、さらには紀元二千六百年奉祝事業等一五項目にわたつて各説し、第三篇総合開発事業として吉野熊野特定地域総合開発事業が詳述されている。各説は、原史料を豊富に引用して詳述され、何れも問題の核心をついている。ただ欲をいえば所轄部局の各種統計をもつと豊富に引用してほしかつたところであるが、全体のボリュームからすれば止むを得ないところであろう。第三篇は、吉野川という豊富な水をもちながら、しかも空しく紀州に流さざるを得なかつた奈良県政七十年の最大の懸案であり、電力を中心とする総合開発――「この近代化の恩恵をいかに活用するか、いな活用できるかに県政の将来がある」問題である。とはいえ、叙述は事態の経緯の解説に終つており、この辺にいわば奈良県の最大の苦悩があると察せられる。

とまれ、経済の高度成長といういわば絶対的な要請のまえに、すでに約一世紀におよぶ自治の歴史をもつ「府県」がどう対処すべきなのか、本書はこの大きな問題を提起しているといえよう。(A5判　一〇六五頁　昭和三十七年三月　奈良県発行)　(熱田　公)

## 学界消息

### 史学研究会関係

十月例会

十月六日(土)午後一時より　於　京大史学科第二教室

ヨーロッパの史蹟をたずねて　豊田　堯

(スライド使用)

### 国史関係

読史会春季大会

六月十七日(日)午前十時～午後五時　於　京大文学部第八教室

平安初期政治史の一側面　伊藤　宗諄

雑徭について　狩野　久

陸田制度について　泉谷　康夫

「鎌倉殿御使」考　田中　稔

「河原者」の系譜に関する一考察　清水　康代

十四世紀初頭の村落領主　大山　喬平

鎌倉仏教について　D・バートン

明治初年の農業生産の地域性　中村　哲